

仙林寺だより

NO. 43
編集・発行
松田正貴

行事報告

学校ボランティア「餅つき」

二月の「お琴演奏」に続き、今回は「餅つき」、仙林寺がボランティア隊出動！みたいな感じでしょうか。六年生は小学校生活もあとわずか、先生方も思い出作りに懸命です。跡取り息子長男瑞生も、早いもので今年中学生、両親のにわか先生に少々テレぎみ。寺子屋お助け隊、宮内氏の御手伝いもあり、つき方を子供達、副住職が相取りで見事四升つきあげました。職員室の先生方へのお裾分けは皆さんに行き渡ったのでしょうか、「私見る人食べるだけの人」が多かったようですが・・・。



学校ボランティア

春のお彼岸

お彼岸はご先祖様に牡丹餅をお供えしてお墓参りをする日、一般的なイメージでしょうか。勿論それも結構なのですが、実は「坐禅をし自分を調える日」として設定された七日間」というのが正しい彼岸の意味のようです。また、お中日（春分の日）は、昼と夜の長さが同じになる日、言えば大きな季節の変わり目でもあります。

植物が新たな枝を伸ばし始めるのもこの時期、新旧入れ替わり、人も植物も気の入口が開くのだそうです。開放気分の時に隙が出来るのが常でしょう。水ぬるむ季節に気まで緩まぬよう修行に励んだのが本来のようです。

さて、その心の調え方として方向性を示したのが六波羅蜜（ろっぽらみつ）の考え方です。布施（与える喜びを知りましょう）持戒（いけないと思つことはしません）忍辱（辛抱強さも必要です）精進（正しさに向つて少しづつでも励みます）禅定（心穏やかに過ごします）智慧（正しさを深く理解します）

ご先祖さまの一番の願いは、私達みんなが幸せで安らかな生活を送ることでしょう。周りの人の幸せを願つて六波羅蜜を实践する時、実は私達自身が安らぎに包まれている事実に気づかされます。お彼岸は、ご先祖さまからのメッセージに感じる行事でもあります。

小さな美術館

「渡辺俊明仏画展」を開催、氏は三春町在住、その柔らかなタッチは多くの女性ファンをお持ちです。今回特に、曹洞宗のポスターに使われた原画も公開しました。

お知らせ

保原警察署々長 久保木義明氏がご栄転されます。住民とのふれあいを大切にされ、歴代署長の中でも最も親しまれた方でした。当山でも坐禅会々員として、また寺子屋では講師として御協力頂きました。「和をもって貴しとなし」仏教精神を心得ておられたものと思います。保原町民の一人として感謝申し上げます。益々のご活躍を祈念申し上げます。

ちよつと一言

「桃花？爛漫」

「桃の炎に燃える丘、実り豊かな保土原を」懐かしの我が母校保原小学校々歌冒頭のフレーズです。彼岸を過ぎた頃、保原の地は桃花爛漫とでも言いたくなるような桃源郷と化します。桃は古来より三千年に一度結ぶ実を食べると不老不死、節分で知られる追儺式（ついなしき）鬼やらいでも桃の木で柀えた弓を用いる、鬼退治は桃太郎等々、邪気を払う霊力を持つと信じられていたようです。邪気を払う「無邪気」としますと桃の花の咲く様は、さしずめ赤ん坊の泣き笑い、素の様相とでも言いましょうか、ありのままの姿に鬼も思わず苦笑い、邪（よこしま）な気も遠のくのでしょうか。禅の世界でも桃は例えとして好んで使われます。道元様にも「桃花のひらくるは春の風にもよほされ、桃花のおつるは春の風にくまる」とあります。風は花を散らすばかりでなく、春の風は花を咲かせる縁ともなり、また散らす縁ともなります。その花もまた風の縁により、咲くときは咲き、散るときは散るばかりただそれだけです。これを仏教では「随縁」または「任運」と言います。鬼を恐れたり、邪気に当てられたり、魔がさしたり、とかく付け入る隙が気になる私達です。「恐れる」のも「差す」のも方向性がそちらに向かっている自分が催す。魔を引き寄せているのは誰あるう自分の心という事なのでしょう。彼岸にこの時期、縁に随うのは勿論、大自然のはたらきという運に任せる自分を見つめる事も大切なお参りなのかもしれません。